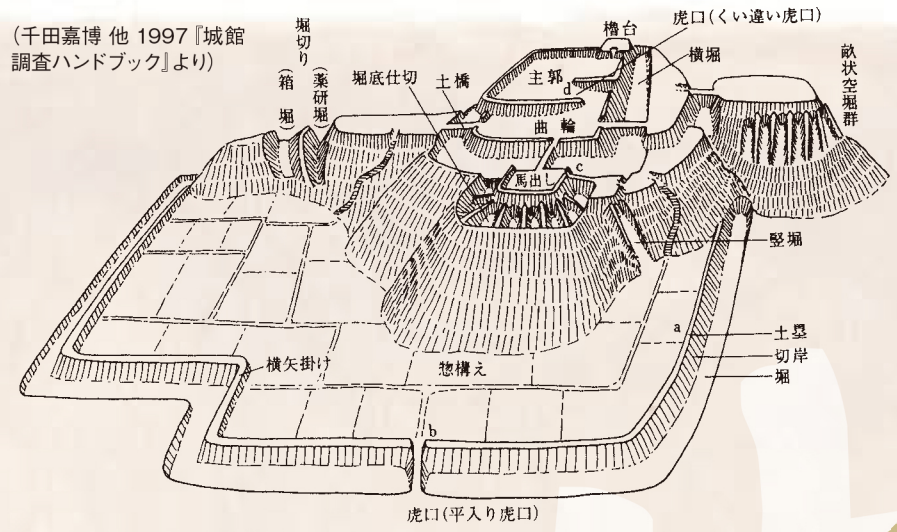
城のいろいろ【其の1】

―石垣のない城―



（千田嘉博 他 1997『城館調査ハンドブック』より）

鹿児島県内に、城跡はいくつあるかご存知でしょうか。その数ざっと千箇所です。「えっ、そんなにあるの？」と思われるかも知れません。一般に城というと、思い起こすのは、大坂（阪）城や熊本城などの高い石垣と天主（守）閣を備えた城だと思います。それは平地に築かれることの多い安土・桃山時代以降の近世の城です。それよりも古い中世の城は、石垣もなく地上の建物は全く残っていないし、堀を掘ったり土を積み上げただけの城なのです。そのような山城と呼ばれる城が日本にはたくさんあります。ほとんどは山深い山林の中にあるので、見つけようと思って入っていってもどこが城跡なのか、城に詳しい人と一緒に行かないと分からないほどです。城という字は「土＋成」からできています。本来は地面に手を加えて築いたのが城という意味です。十四世紀の南北朝のころ、日本全国に戦乱が拡大したとき、背後の山地に戦時にそなえた「詰め城」が造られます。山城の出現です。

山の中に入って尾根づたいに歩くと、歩く場所が途切れ、急に谷状の窪みになる場所が時々あります。そこが堀なのです。もちろん水のない堀、空堀です。意図的に尾根を断ち切る「堀切り」で、敵がスムーズに進入できないように工夫したものです。また、敵が入ってくる方向に、土手を築いて敵を迎え撃つ土塁を構築します。

一九八〇年代以降の研究の進展によって、全国でこのような城が調査され、城の設計図ともいうべき「縄張り図」が作られました。その結果、日本全国では数万の城跡があることが分かりました。全国的な研究団体には「中世城郭研究会」という組織や織田信長・豊臣秀吉の時代の城を研究する「織豊期城郭研究会」、朝鮮半島に日本人が築いた、豊臣秀吉の朝鮮出兵のときの「倭城」を研究する「城郭談話会」などがあります。四百年ほど前、第十七代島津義弘らが在番した韓国の泗川新城も有名な城です。地元の鹿児島にも、熊本・宮崎・鹿児島三県の城を研究する「南九州城郭談話会」があります。このような研究会の地道な調査によって、今ではいろいろなことが分かってきました。

南九州の山城は、シラス台地を削り、深い堀を設け、建物を建てる平坦な場所（曲輪）を区画しています。そして、曲輪ごとにそれぞれ名前がついています。そのため、どこが本丸か分かりにくく、列島中央部（北部九州～東北地方南部）の城、本丸を中心に二の丸、三の丸と階段状になる城と異なることから、「救心構造をもたない館屋敷型」の城とされています。

姫木城跡

霧島市内の城跡は、昭和六十二年に刊行された「鹿児島県の中世城館跡」に掲載されたものや近年の新しく発見されたものも含めると、旧横川町七、牧園町四、霧島町四、溝辺町五、隼人町二十三、国分市二十六、福山町十箇所の城跡があります。合計で七十九箇所もあるのです。そのうち代表的なものには、国分平野の中央に聳え、中世に激戦があった姫木城があります。姫木城は古代隼人族が立て籠もった城としても知られております。また、国分の城山公園の「隼人城」も有名です。江戸時代になると、その麓に石垣のある舞鶴城が築かれ、いざという時の詰め城として隼人城がその役割を果たしたのです。姫木城・隼人城ともに石垣のない城です。

文責＝重

郷土史への扉